

研究ノート

「教育」を考える

上 西 妙 子

〔I〕 人間と教育

人間は、生れたときから「教育」され続ける。なかでも「学生」と呼ばれる人たちは、知識を得て判断を実践するなかで、幼少年期には許された依存を脱して「自立」を学ぶようにと求められている「教育中」の存在である。「教育」が有効だというのは、人は教育を受けることで生来の（社会）環境・条件から脱却できるという啓蒙哲学の考えによる。そして「学校教育」の期間にある若い人たちは、「変容への準備期間」にあるという理解において、人間としての希望が制度として託されている存在である。「学生さんはいいね」という言葉は、かつては優しさをこめて本気で言われていた。青年期 adolescence という語は、ラテン語の成長 *adolescere* に由来する。しかし、成長は自発的であるときにこそ美しいのだから、「学生」はいまやむしろ惨めである。期待され促されて進むべき道には、期限付き目標、機械的な競争、審査、振り落としといった試練がたっぷりと埋め込まれている。

もともと、完全に子供ではなく大人でもない学生、別名「若者」は、羨むべき特権を持つと考えられながらも、いつの時代も傷つきやすい被害者か危険な存在として疑いの目でも見られてきた。そして現代、その危うさがさらに高まっているように見えるのは、大人としての役割を学習して、それを実際に社会のなかで担うまでのプロセスが、今までの世代よりもずっと複雑になってい

るからだ。以前に増して資格が要求され、求められる水準は上昇している。就学期間は長くなり、就職形態がより不安定になる一方で、職につくために経るさまざまな過程には過剰な操作が組み込まれている。他方、親の権威失墜と同時に、親であるという意識の弱体化や自信喪失が広がっている¹⁾。

この動きの反面でもあるのだろうが、最近の「若者」（統計調査では、14-6歳から25-9歳までの年齢層を指す）において、青年期の始まりは早まると同時に、その期間は長引いているといわれる。つまり、依存から自立へと移るべき幼年期から青年期への境界がぼやけ、青年期において学び取ることが期待される「自立や責任をとる」ということが、明確に「依存」とは別のこととして受け取られてはいないようなのだ。今の時代は、「社会に巣立つ」という力強いイメージを育ててはいない。子供から大人になるのが難しくなっている。

【Ⅱ】女性と教育

一方、ここでタイトルを「女性と教育」に設定すると、自動的に浮上してくると考えられるのが、受動（被害）意識につきまとわれた「性役割の再生産」という執拗な継続の問題である²⁾。この問題はフェミニズムの立場によって、いくつかの視点で捉えられる。すなわち、父権的な制度の再生産に組み込まれる女性を捉える視点であり、また、女性の見えない労働を資本主義と父権制度の連鎖的な搾取の例として捉える視点である。さらに、〈女性性〉の意味の再生産の視点である。

この分析が綿密であることは、そう簡単なことではない。たとえばフェミニズム批評の古典とされる『自分だけの部屋』の著者ヴァージニア・ウルフは、階級問題には無頓着であるとも批判される。たとえば批判の対象となった彼女の言葉は、上に触れたいいくつかの〈女性の再生産〉に触れるものだが、以下のように展開される。「家庭の天使とはどういうものなのか。（…）大変魅力的で、利己的なところがまったくなくて、家庭生活をやりくりする難しい術をみごとに身につけていて、日々が自己犠牲なのです。チキンを食べるときは足を

「教育」を考える

取り、隙間風がするときには自分がそこに座り——要するに、自分自身の考えとか望みはいっさい持たず、他の人の考えと望みにいつも合わせる方を好むようにできているのです³⁾。ウルフを批判する人は、「家庭の天使」という名のイデオロギーがヴィクトリア時代の末に存在したのは中流家庭以上においてであって、それが下層の家庭にまで浸透していたとは考えられないということである。批判されるのは、自身の帰属集団にとらわれたウルフの階級問題意識の欠如である。

ところで先に、現代を大人になりにくい時代と言った。そこでは、この性差の再生産の問題は、「姿を整えよ」と脅迫されている現代の若い人において、さらに微妙に複雑になっているのではないだろうか。身構える彼らの姿として浮かんでくるのは、性別にかかわらず、賞味期限不明であるが「おいしそうな」、凝った化粧や衣装と振りが「かわいい」と評するしかない人物像である。戦略と擬態と選択とさし当たっての決意は、人の表層から内面までをくまなく循環して覆っている。

そうすると、ここでの問題は、「女」と「男」というカテゴリーが互いに相手を通してどのように明確化されるのかを考える、ということだけでもないようなのだ。いわば「女」も「男」も、定義づけをかわす「場」へと逃げ込むように見える。勿論、社会的に安定した層は存在するにしても、あらゆる欲望を飲み込む平静さ（動じなさ *impassibilité*）が、外面の装飾の下に隠されているのが現代だと思える。この混沌を見極める仕事は、私の手にあまる。また、この脈絡で「主体」なるものを考えるときには、その混成性ゆえに、問題はフェミニズムに限定して考えうるものではないとも私には思える。そこで以下に試みるのは、今の時代に「教育」をめぐって取りうる姿勢を、とにかく考えてみることである。

【Ⅲ】「探求」の方法と姿勢

モンテーニュの『エッセー』の第一巻、第一章は、「人はいろいろな方法によっ

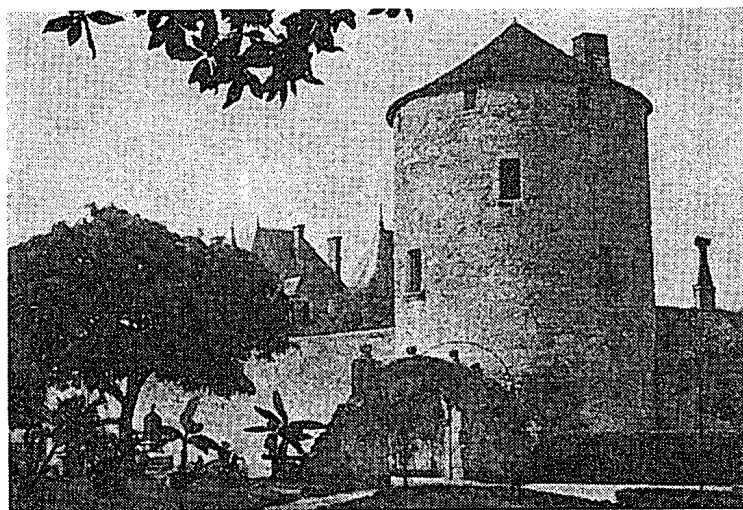
「教育」を考える

て同じ結果に到達する]⁴)と題されている。モンテーニュはフランスでは「モラリスト moraliste」と呼ばれるのだが、フランスで「モラリスト」と言う場合、その第1義は「人間探求家」であり、第2義が「道德家」である。辞書にもモラリストとはモンテーニュやパスカルなどを指すとある。「探求する」人は、単に問題を解決しようとして考えるのではない。彼らは、不確実性のなかで思考することを試みる。

ミシェル・ド・モンテーニュ（1533-92年）が生きるのは、キリスト教が全ヨーロッパにわたる統一原理であった中世の崩壊がすすみながら、いまだ絶対王政の国家が樹立されていないフランス16世紀という、歴史の転換期である。その一生は、宗教改革の動乱のなかで過ぎていった。ルネサンスの本家のイタリア諸邦とはちがって、アルプス以北の国々では、ルネサンスという人間の再生は、宗教改革の騒乱のなかですすめられねばならなかった⁵)。



ミシェル・ド・モンテーニュ



館の塔

大西洋に面する町ボルドーの市長の職を37才で辞したモンテーニュは、館の塔の3階の書斎で、それ以後20余年にわたって『エッセー』の執筆に専念した⁶)。 「エッセー」とは、動詞 *essayer* の名詞 *essai* であり、動詞「試みる」の名詞形「試み」である。つまり「人間探求」とは、何度も繰り返される問いかけの姿勢の軌跡なのであり、そしてその一つ一つの「姿勢」が、全体的なものなのだ。

「教育」を考える

モンテーニュは言っている。「私は、礼儀作法や人づきあいのうまさ、端正な身のこなしが、精神と一緒に作り上げられることを望みます。精神を鍛えるのでもなく、肉体を鍛えるのでもなく、人間を鍛えるのです。二つを別々にしてはいけません」⁷⁾。モンテーニュは、リズムとハーモニーを心得た社交人であった。そのことは、相手にさらに話しよくさせる会話での介入を彼が心得てもいれば、他者とともにつねに快く再生産（再賦活化）される感触を知っており、それを支える能力をも持っていたということだ。教育に期待される子供の社会化とは、「他」に媒介されて「私」が生まれるということなのだろうが、そこには、ここでモンテーニュが言うような軽やかさがあって欲しいものだ。

そして日本の現状である。文部科学省は、2002年の春から『心のノート』と称する冊子を、「補助教材」（小1・2年用、3・4年用、5・6年用、中学生用の計4種類）として作成している。これらは教科書ではないので、検定を受けることもなければ各学校の採択に任されもせず、全国の小中学生に配布されている。

内容は、質問事項にたいして子供たちに答えを書き込ませるもので、各巻頭には「フェイスシート」と題される質問領域が設定されている。低学年用のものは「あなたのことをおしえてね」と題され、〈とくいなこと〉、〈できるようになりたいこと〉、〈たからもの〉を書かせるという具合だ。中学生用のノートでは「そっと自分に聞いてみよう」と題された「フェイスシート」に、13の質問項目が配されている。それらの質問はさらに内面において子供たちに干渉するもので、〈自分のすきなところ〉、〈むちゅうになっていること〉、〈自分のなりたいところ〉などに答えさせている。

『心のノート』には、今までに列挙した質問とはやや別種であるが同様に執拗な質問として、〈嘘をついていないか〉、〈感謝の気持ちがあるか〉、〈友だちと仲良くしているか〉といったものがある。身体に近いものから空間的に離れたものへと意識が向かうことが、社会的動物としての人間の発達だと一般にいわれる。『心のノート』が意図するのは、子供たちに、「自分」からはじまって

家族、友だち、学校、地域、そして「祖国」へと関心を広げさせ、それらに「愛着せよ」と促すことだ。『ノート』は「あなたがそだつまち」や「わたしたちの国の文化に親しもう」と呼びかけるのだが、小学校6年生という時期にある決定的な時期と捉えるのだろうか、その冊子の最後には、富士山の写真入りで「見つめようわたしのふるさと、そしてこの国」とある。

これらの質問攻勢は、一見、勤勉な精神活動を促すように見える。質問に答える子供たちがいたるべきところには、「世界調和」のイメージが用意されているかのようだ。しかし、そのプロセスにおいて感情は疲弊しきるだろう。判断保留や考えの再検討の契機を与えないままで次々と繰り返される質問がひたすら子供たちに問いたただすのは、尽きることのない自己への執着のあり方や強さである。これらの質問を自らに向ける子供たちは、激しい感情の興奮のうちに、愛憎一体の思いを対象に感じるのではないだろうか。編者の意図に答えるには、自己愛（この場合は、精神分析や現代の心理学の用語としてのナルシシズムを指す）にまみれた号泣をもってしか応じられないという感じが、私にはする。日本的「教育」は、センチメンタルな言説化を強いてくる。

モンテーニュは、彼に息子の教育法を尋ねた婦人に、「やろうと思えば何でもできるかわり、よい行為だけを好むようにしつけてください」⁸⁾と答えている。問いたただされ深刻になる自己愛は、自分にとって「よい行為」が何なのかわからなくなるはずだ。そして、モンテーニュがここで支えとしている自己愛とは、17世紀後半から18世紀にかけてフランス文学において主題となった「自己愛」、amour-propre 自尊の心と捉えられる。

【IV】 ハラスメント横行

センチメンタルな教育は、その結果として堆積する自己愛的エネルギーを「モラル・ハラスメント」の横行に加担させるにいたる。「モラル・ハラスメント」という語は、「極度に自己愛的な人間による精神的な暴力」を指す。自分を一番と捉えるその主体は、尊重していない相手を傷つけることになんの問題

も感じない。この悪質な暴力は、個人におけると同様に、自己の利潤や効率追求を第一とする企業や各種の組織体にも見られるものだ。そういった組織では、自己愛的な人間は指導的な位置を占めることができる。そしてその組織の体質をさらに自己愛的にすることで、社会的なバランス感覚を欠いた不祥事を生み出し続ける。こういったエリートたちは「自分は正しくいいことをしている」と言い続けて、一見疲れてはいないように見える。これに対して、「自分は…、自分は…」と語り続けるように文科省戦略によって奨励され、自分から国へとその思いを広げていく子供たちは、ぐったりしながら興奮している。

この「ぐったりした興奮」を、藤田省三（1927-2003年）による現代の精神批判につなげられないだろうか。藤田は、「今日の社会は、不快の源そのものを追放しようとする結果、不快のない状態、すなわち『安楽』を優先的価値として追及することになった」とし、この「安楽への隷属状態」を「安楽への全体主義」と呼ぶ⁹⁾。「不快を避ける行動を必要としないですむように」として求められる「安楽」への狂おしいほどの要求は、同時に、「安楽」喪失への焦立ちや不安で人々の心を満たす。この状態を、「安らぎを失った安楽」という前古未曾有の逆説の出現であると藤田はして、それを「能動的ニヒリズム」¹⁰⁾と名づける。「ぐったりした興奮」とはまさに、「能動的ニヒリズム」ではないだろうか。

「心のノート」が子供たちから引き出そうとする執着の対象としてのさまざまな自己像とその延長は、「空しい同一感情の分断された反復」¹¹⁾にしかすぎない。モンテーニュは、子供にたいする忠告として言っている。「汗や、寒さや、風や、太陽や、彼が軽んずべき危険に馴らしなさい」¹²⁾。ところが、「ぐったりした興奮状態」にある人は、人間にたいして「意味」を教えてくれるこれらの軽んずべき危険のなかの「手ごたえ」や「実感」を恐怖するだろう。「高慢な風貌の奥に恐怖を隠し持った」¹³⁾現代人は、「具体的な不快に対応した判断と工夫と動作」を自らにたいして問うことがない。回避されるこれらの作業こそは、「その人自身が自分の望ましい生き方について抱いている期待」が結びついて

いくものであり、さらには、「工夫の力と行動の能力」¹⁴⁾を育てていくものだというのに。

こういう態度はまさに、「essai エッセー」の回避である。そしてこの一般状況は、「説明してくれればわかる」という主張が、広く無効になっていることを語っている。というのは、口ではそう言いながらも、「わかる」にいたるために越えるべき不快に対応した「判断と工夫と動作」を取ることが、今や若者だけではなく私たちにも難しくなっているからだ。それは、生き物としての「識別力と生活原則と智慧と行動が具体的な個別性」¹⁵⁾を持つような経験が、日常の生活において希薄になっているということだろう。

「ぐったりした興奮」の悲哀が、大人たちのものでもあることを考えよう。巨大な消費市場の展開とそれを操作する技術の発達は、私たちに自らの欲望と嗜好を重視することが個性の主張なのだと感じさせる。「こだわり」を持つことが个性的なこととされているのだ。消費は直ちになされて欲望は充足され、さらにこの循環が続くことが求められる。そして若者をターゲットにする文化の爆発的な展開は、中高年をも「若者」として遊ばせる。斬新さへの飽くことのない執着にたいして次々と提供される種々の快の変化の速さは、ファッションや食生活、そしてスポーツや余暇活動をめぐって広く見られる。人々は浮き足立っており、これらの誘惑を遠くへ押しやろうと考えることすらなく、また、その滋味を忘れてしまったかつてありえた「義務」や「威厳」や「節度」の価値観を思うことも、もう忘れてしまっている。

【V】 欠如と過剰

平安な充実の時は、得がたい、つまり、有り難いということだ。「若者」は「今」にたゆたい、先を考えることなく「今」に遊ぶという特権を持ってきたというのに、しかも若者は、さらに言えば人間とは、一生を通して試みと失敗からなる経験を通して自分自身の限界を明確にしようとするものだというのに、とにかく辛いのは、そういう試みをし、またそれらが失敗か否かが判断される

のは、動じない「大人」の決めた時間的、空間的、価値的指標にたいしてだということである。それは勿論、人生というものの本来の試練ということである。しかしさらに、その一方で、「安楽の全体主義」に君臨するタレントと呼ばれる人たちは、「個」として充実した快樂主義者であれと私たちを追い立てる。

「安楽への全体主義」の対極に自らを置くことを思想と実践として求めたのが、たとえばアイルランドのダブリンに生まれた作家サミュエル・ベケット(1906-89年)である。彼を苦しめたのは、アイデンティティの欠如ではなく過剰であった。「他者なしにはありえない自己」とされる「アイデンティティ」という概念の認知はエリク・エリクソン(1902-94年)に始まるが、彼は「アイデンティティ・クライシス」と名づけた心理を、社会復帰に不安を持った第二次世界大戦の復員兵たちと臨床的に接するなかで見抜いたのだった。彼は「アイデンティティ・クライシス」の定義を、「個人的同一性と歴史的連続性の感覚を失い、自分とは何か、自分がどこに属しているのか、自分は何をしたいのか」という感覚を失うことだとした。「現代人」は、今から50年前に戦場から戻った兵士が感じた居心地の悪さを、本来の地にあっても感じるようになったといえる。

ところが、書くことの自由を求めたベケットが求めたのは、母なるアイルランドという過剰なアイデンティティからの自由だった。彼にとって英語という言葉は、連想や言及——アングロ・アイリッシュ的な過剰性と自動性——に満ちすぎていた。ベケットが自らに問うたのは、「存在とはなにか、無知、不能、貧窮に徹するとはどういうことか」であり¹⁶⁾、彼が求めたのは、そういう問題の表現にもっと直接的に集中するための自由であった。第二次世界大戦下のフランスで対独レジスタンスに加わったベケットは、彼にとっては外国語であるフランス語によって、戦後すぐに創作を始めた。彼はそこに、求めた自由を得たのだった。

ベケットがここで回避する「連想、言及の自動性」は、表現にたいする消極性を語るのではない。「無知、不能、貧窮に直接的に集中」するベケットの感

「教育」を考える

性は、循環する意味生成の環から逸れるという冒険であり、誰にでもできることでもなければ、第一、それを持つと望む人間も稀である。それは創作の一つの特異な方法論であって、たとえばジャコメッティの彫刻の表現感性にかよものではないだろうか¹⁷⁾。



ジャコメッティ《ヴェネツィアの女V》1956年

【VI】 エコロジー宇宙

藤田省三は先に述べたように、現代人を捉える「安らぎを失った安楽」を新種の「能動的ニヒリズム」と定義したのだが、この「安楽」とは別種の「価値ある安楽」についても語っている。それは、「何らかの忍耐を内に秘めた安らぎ」¹⁸⁾と定義できるもので、それはもっとも望ましい生活態度のひとつともいえる。藤田はこの種の安らぎは「他人を自由にし、他人の自発性の発現を容易にする」¹⁹⁾と言う。つまりここでは、「人間の価値」は、向かい合う相手にどうい影響を与えるかで計られるのだ。自己愛的な人間が相手を衰弱させ骨抜きにするのに対して、こういう人間は、両者の「関係」から「個人」を高貴にしていく。そして「世界」を得るにもいたるだろう。それが、「教育」と名指さ

れる行為連関ではないだろうか。

さらにもうひとつの「安楽」感を、ヴァレリーが示唆している。ヴァレリーは、身体の動きとしての思考を思念した詩人といえるが、彼は「舞踏の哲学」²⁰⁾において、人間の真の「動性」の美しさを語っている。たとえば人間は、じつと太陽に向き合って不動の姿勢をとるガラパゴス島のイグアナに威厳を見もすれば、また、イルカが海の上で戯れているのを見ると、イルカは踊っていると捉えもする。しかし動物の所作は、実際には必然性に支配された本能的な行動にすぎず、イグアナも体温を保つために長時間の日光浴を必要とするということに過ぎない。ここから、つぎの言葉がでてくることになる。「心身ともにリラックスして無為を楽しむ人間は、想像力も働かせることによって、真に無為の価値を知っている」²¹⁾。ここに示唆されている身体（存在）感覚こそ、「教育」の到達点としてもある感覚、つまり自身が「在ること」の感覚ではないだろうか。そこには、「わかる」という動きが受け入れられている。

「子供」が「大人」から受ける扱いとして、稀ではあるがそれ程難しいことではない心遣いの例がある。それは、モンテーニュが語る彼の父親の態度であり、またその結果としてありえたモンテーニュの「幼年時代の能力」である。彼の父親は息子を、いきなり乱暴に眠りから引き離すことを恐れた。そこで毎朝、幸いなことに彼らの住居は石造りの本物のお城であったので、何枚もの扉のむこうから「或る楽器」²²⁾を奏でさせることで父親は彼を起したという。モンテーニュはそのおかげで、「なめらかな声と身振りで、自分の演ずる役割をこなしていく能力」²³⁾を持つことができたと言う。モンテーニュの父親が息子にたいして持った敬意は、息子モンテーニュに自己についての柔和な全体を意識する能力を与えた。その賜物を、息子モンテーニュが複雑な大人になっても単純に持ち続けたとは思えないが、身体（存在）感覚の快さというその記憶は、彼における精神的な安逸感の指針であり続けただろう。

「星の王子さま」は、サン＝テグジュペリの小説の主人公の名であり、この王子さまは、遠くの星から一人で地球にやってきたことになっている。彼が地

球に着いたときの地球の説明として、「人間が地球の上に占めている場所は、わずかです」²⁴⁾とある。まことにその通りであり、エコロジーの思想が生まれる。

[VII] 女と男

さて、女も男も、地球のほんの一部を占めて、ほぼ同数が存在する「人間」種である。そして「同数である」ことから、「棲み分け」エコロジーとは別の思想が生まれることになる。適切に組み合う「対」でもあれば、見逃すことなく戦い合う「対」ともなる。しかしなによりも「男女」においては、「一つの関係を十全に生きる」という大切な思想が生まれることになる。

恋愛においてつねに幸福者ではありえなかった悔しい男アポリネールの詩に、*Tu n'as pas surpris mon secret* という詩の第一行をタイトルとする8行からなる短い詩がある。去っていった女性に向けられたこの詩は、「あなたは私の秘密を襲わなかった」²⁵⁾と恨みを言う。*surprendre* という動詞は英語の *surprise* と同義であり、「驚かせる」の意味もあるが、語の構成から見ると、「上からつかみかかる」という意味である。それは、「不意を襲う」という不快な行為をも指す。「悔しい男」アポリネールは、「私も知らない私の秘密」が異質の他者に襲われ暴かれ、共犯者として共有されることを望んだのに叶えられなかった苦しみを歌う。そしてこの一行のあとには、一種の風景描写が続くだけで短い詩は終わる。それ以外に、「時の経過」を待つ以外に、どんな方法もあるわけがない。

さしあたり、人をも自分をもじっと見つめ続けることだけが仕事である。その作業において、社会的な脈絡で異質の人に向き合う喜びにおいては、同化政策の愚を思い切り笑うことだ。そして、「依存の居心地」のよさから逸れて、強健な喜びを持つことだ。藤田省三は、安らぎを失って動き回る「安楽への隷属」にたいして人が払ったコストは、「喜び」²⁶⁾であったとする。私は、モンテーニュの以下の言葉に、常なる若さと成熟、「教育」への希望を見る。

知ることとおなじように、疑うことは私には気持ちがよい。

知恵のもっとも明白なしるしは、常にかわらぬ喜悦なのです。²⁷⁾

注

- 1) 若者を取り巻く状況に関しては、フランス外務省発行季刊広報誌 *LABEL* (第51号、2003年7-9月) を参考にした。
- 2) この問題に関して参考になるのが、『娘の学校』(マリー・デュリュ＝ベラ著、中野知律訳、藤原書店、(1990) 1993年) である。同書は、「自分の妻にふさわしく、無知で無垢」に若い娘を育てようとする男の欺瞞を描く二人の作家(モリエール『女房学校』とジッド『女の学校』)の小説のタイトル *L'Ecole des femmes* と同種の *L'Ecole des filles* をタイトルとする。同書の執筆目的を著者は、「生徒が男子であるか女子であるかによって、就学経歴の各段階でどのように多様な差異が現れてくるか、その現状明細書を作成すること、そして、そうした差異が異なる『本性』の表れなどではなく、いかに社会的な現象の産物に他ならないかを明らかにすること、さらには、そうした状況の根底にあるのが、生徒たちがやがて組み込まれていくことになる成人社会の男女の社会的ステータス(職業生活においても家庭生活においても)であるということを報告すること」とする。

同書はまた、社会的行為者としての女性が、現実的な束縛のなかで取る戦略としての選択に理解を示す。そして、彼女たちの見かけ上の順応主義のかなたに、新しい男女の社会的な関係の確立を期待する。多種の内容をふくむ再生産メカニズムにおいて、現在にいたるまで工夫され維持されてきた男女間での役割分担であるが、現状に代わり得る世界がまだハッキリとは見えていないなかで、(少なくとも現在機能している)社会の歯車の調子を狂わせることにもなりかねない問題が生じつつあることを、「保守的な男」だけではなく「女」も予感している。

いわば地球規模での「再生産メカニズム」を破綻させることのないように、再生産システムの循環の魔力(それは諸所で不快を強いる)を打ち破るような男女間の新しい社会的関係を探り、その確立へと努力することが、社会全体での関わりにおいて探られることを、同書は期待している。

- 3) 富山太佳夫「フェミニズム批評の混沌」(『文化と精読』名古屋大学出版会、2003年) 51頁に引用。
- 4) ミシェル・ド・モンテーニュ『エッセー』原二訳、岩波文庫。引用文は同書を用いた。しかし、以下の引用箇所表示は、同書の紛失のため、『随想録』関根秀雄訳(白水社、1995年)での対応する箇所を示す。(9頁)

「教育」を考える

- 5) 竹田英尚『モンテーニュ 日常の思想』、青山社、1984年、3-4頁。
- 6) モンテーニュは、館の一隅の塔に手を加え、1階に礼拝堂、2階に休息のための小部屋、3階に書斎を作った。書斎は、テーブルと椅子のあるところ以外は円形で、そこに5段に本が並んでいた。

塔の中に身をおいたモンテーニュに対して、日本の中世の書き手をも思いつつ世界中を動き回って生きた堀田善衛は、その晩年に、モンテーニュの生涯を追って『ミシェル城館の人』（全3巻、集英社）を著した。
- 7) モンテーニュ、291頁。
- 8) 同上書、294頁。
- 9) 藤田省三『藤田省三著作集 6』みすず書房、1997年、29頁。
- 10) 同上書、35頁。
- 11) 同上書、36頁。
- 12) 前掲書、291頁。
- 13) 藤田、34頁。
- 14) 同上書、36頁。
- 15) 同上書、36頁。
- 16) 参照：ジェイムズ・ノウルソン『ベケット伝』高橋康也他訳、白水社、2003年。
- 17) ベケットの『ゴドーを待ちながら』のパリでの再演において、舞台上に一本ポツンと立っている木の「装置」を製作したのが、ジャコメッティであった。
- 18) 藤田、29-30頁。
- 19) 同上書、30頁。
- 20) Paul Valéry, *Oeuvres Tome I*, Bibliothèque de la Pléiade, 1957, p. 1393. 『ヴァレリー全集 5』菅野他訳、筑摩書房、1967年、298頁。
- 21) 同上書、298頁。
- 22) 『エッセー』の1580年版には、「私はそのためにエスピネット（旧式ピアノ）の奏者を持っていた」とある。
- 23) 前掲書、309頁、314頁。
- 24) アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ『星の王子さま』内藤濯訳、岩波書店、オリジナル版、2000年、82頁。
- 25) Apollinaire, *Oeuvres poétiques*, Bibliothèque de la Pléiade, 1977, p. 159.
- 26) 前掲書、33頁。
- 27) 前掲書、283頁。

Summary

Sur l'éducation

UENISHI Taeko

On naît et on est forcé de se faire éduquer pour devenir indépendant. Pourtant aujourd'hui ce processus visant à l'autonomie se fait de plus en plus difficilement; le processus étant devenu plus long et surchargé, il s'impose plus sévèrement. Aux jeunes, filles et garçons, qui me paraissent avoir envie de s'en abstenir, j'aimerais citer ci-dessous quelques mots encourageants qui pourraient leur servir de conseils.

Notre guide, c'est Montaigne qui commence ses *Essais* par disant: <<Par divers moyens on arrive à pareille fin.>> C'est la manière de bien penser dans l'incertitude, en s'y engageant cependant en entier, comme dit notre guide: <<Je veux que la bienséance extérieure, et l'entre-gent, et la disposition de la personne, se façonne quant et quant l'âme. Ce n'est pas une âme, ce n'est pas un corps qu'on dresse, c'est un homme; il n'en faut pas faire à deux.>>

Ce qu'il faut éviter, c'est d'être sentimental; sinon on risque de tomber narcissique. Un narcisse même étant capable de tout faire, si'il le veut, ne saura pas en déceler ce qui lui est bien. Ce narcisse se reporte sur l'image de l'homme d'aujourd'hui que décrit Fujita, comme étant sujet au néo-nihilisme actif qui cherche à dissiper la cause même du désagréable; de sorte qu'on reste en aisance sans tranquillité, car ce qu'on cherche étant d'une précarité extrême, on est toujours angoissé de peur de le perdre.

Ainsi oublie-t-on une autre leçon de Montaigne: <<Endurcissez-le à la sueur et au froid, au vent, au soleil et aux hasards qu'il luy faut mépriser.>> Prendre

en mains le désagréable volontairement qui nous vaut des jugements, des ressources et des actions appropriées; ces essais se lient à l'aspiration latente de chacun envers sa façon idéale de la vie.